

研究報告

臨地実習における看護学生の看護観の変化

－ 基礎看護学実習Ⅰ・Ⅱの「実習のまとめ」のテキストマイニング分析 －

秋山優美¹⁾、加藤隆雄²⁾

¹⁾中部大学生命健康科学部保健看護学科、²⁾南山大学 人文学部 心理人間学科

要 旨

研究の目的は、基礎看護学実習を経験した学生の看護観が、学年を経てどのように変化をしていくのか、そのプロセスを明らかにすることである。この目的のため、本研究ではA看護専門学校において1年次から2年次にわたる実習に参加した同一の30名の学生の経年変化を分析した。実習が終了した時に記述する「実習のまとめ」をデータとして用いて、学生の看護観は実習を重ねていくことでどのような変化をしているのかを明らかにした。記述内容の分析は、Text Mining Studio 5.2を使用し、単語頻度解析とことばネットワークの分析を行った。この結果、実習を重ねていく中で学生は、看護師の仕事に眺めていた立ち位置から看護師側の立ち位置に立てるようになり、患者の気持ちに意識を向けることができるようになったことが明らかになった。実習での経験を通して、1. 身体的実践としての看護師、2. 看護実践者への一歩、3. 患者に対する「気持ち」の出現、4. 「コミュニケーション」の変化の4点において看護観の変化が起きていることが明らかとなった。今回の研究では1年次から2年次での看護観の変化を対象にしたが、今後は看護基礎教育終了までの同一の学生集団の看護観の変化を明らかにしていくことが必要である。

I. はじめに

看護基礎教育において臨地実習は、看護師になるために重要な学習方法の1つである。臨地実習で学生は、学校で学習した知識・技術・態度を実際の看護場面で実践し、学生自身の看護観を形成していく。

薄井¹⁾は「看護実践を支えるものが看護観であり、看護観は看護技術に表現され、看護の正しい発展には方法論や技術論のみならず看護観が必要であり、看護観なくして看護実践はできない」と述べている。

学生が看護師として職業意識を持ち、働き続けていくうえでも看護観を形成していくことは重要である。したがって、学生の看護観の変化のプロセスを明らかにすることは、看護基礎教育における学生指導にとって重要な知見を提供すると考えられる。

実習を通して学生の看護観がいかに形成されるかについては、これまで掛谷²⁾が、実習前後での学生の看護観の変化を研究している。また、當間³⁾、柿沼

⁴⁾も実習での経験によって看護観が形成されていくことを明らかにしている。また、しかし、いずれの研究も1つの実習を単発で取り上げて、そこでの看護観を研究しているものであり、実習を積み重ねていくことが学生の看護観の形成に与える影響について検討はされていない。実習を経年比較の観点でとらえた研究としては、看護学校2年次生の実習前後の看護観を対象とし、上級生では実習の積み重ねによって看護観に変化が起きていると結論づけた安藤ら⁵⁾の研究がある。しかし、安藤らは、2年次生を他の年次の学生の体験と比較はしているが、同一集団を研究対象としているわけではないため、同一集団の学生が実習を重ねることによってどのように看護観が変化したかは明らかになっていない。同一集団の学生を継続的に研究したものは、大槻⁶⁾の研究がある。この研究では、1年次後期から3年次の母性看護学実習終了まで、継続して看護学生の母性意識のデータ収集を行い、分析している。

ただし、同一集団の経年変化は扱われているものの、研究対象が看護学生の母性意識に特化されており、学生の看護観全体の構造的な変化をとらえるに至っていない。同一集団の学生を対象として、実習を積み重ねることで、学生の看護観がどのように変化していくのかを明らかにした研究はこれまでなされていない。

以上を踏まえ、本研究では学生の看護観が実習を重ねることで、どのように変化していくのか、そのプロセスを明らかにする。

用語の操作的定義

看護観：看護に対する見方、捉え方

Ⅱ. 対象と方法

1) 研究対象者

2012 年度に A 看護専門学校に入学し、1 年次から 2 年次に病院での臨地実習に参加した学生 30 名。

2) A 看護専門学校の基礎看護学実習の概要

対象とした学生が参加した実習の位置づけの確認のために、A 看護専門学校における実習の概要を示しておく。A 看護専門学校では、臨地実習を 1 年生の 8 月下旬から開始する。1 年次 8 月の臨地実習（「基礎看護学実習Ⅰ」）では、1 週間の臨地実習を行う。この臨地実習で学生は「看護学生」として初めて病院に入り、患者の入院生活や看護活動の実際を知る。2 年次では 6 月中旬から 3 週間の臨地実習を行う（「基礎看護学実習Ⅱ」）。学生は教科書や学内演習で学習したことをふまえ、実際に患者を受け持ち「看護援助」を実践する。看護援助の実際を体験し、個別性を重視した具体的な看護の在り様を主体的に考えていくことが求められる。

それぞれの実習目的および実習目標は表 1 のとおりである。

3) 調査期間

2012 年 9 月から 2013 年 8 月である。

4) 調査内容

病院での臨地実習に参加した 30 名が各実習の終了後に記述した「実習のまとめ」をデータとして用いた。

「実習のまとめ」は、実習を振り返り考えたこと、学

表 1 基礎看護学実習の実習目的・目標

基礎看護学 実習Ⅰ	実習目的： 入院している患者の生活と環境を知るとともに、看護活動の実際を学ぶ。
	実習目標： 1. 入院生活環境の実際を知ることができる。 2. 患者の状況に応じた看護を知ることができる。 3. コミュニケーション技術を通して、患者—看護師の望ましい人間関係について考えることができる。 4. 信頼される基本的な態度を身につける。
基礎看護学 実習Ⅱ	実習目的： 人間に対する理解を深め、日常生活援助を通して看護実践に必要な基礎的能力を養う。
	実習目標： 1. 健康問題のある対象に対して、看護のプロセスを通して援助することができる。 2. 信頼される看護者としての態度を身につけることができる。

A 看護専門学校 基礎看護学実習要項より抜粋

んだことなどを整理し記述するために準備されたものである。学生には、実習前のオリエンテーション時に実習期間中を振り返り考えたこと、学びを記載するように説明している。すべての実習において同じ形式であり、記述内容も統一されている。学生は「実習のまとめ」を用いることで実習での振り返りを行うことや学びを整理することができ、教員・臨床指導者は、学生の実習での学びがどのようなものであったかを記載内容から確認することができる。

5) 分析方法

「実習のまとめ」の記述内容の分析にあたっては、テキストマイニングのプログラムである Text Mining Studio 5.2（株式会社 NTT データ理数システム）を使用した。本研究では、単語頻度解析とことばネットワークを用い分析を行った。

単語頻度解析は、テキストの中で最も多く使用されていた単語を抽出したものである。出現頻度は上位 20

語に設定し、抽出品詞は、名詞・動詞・形容詞とした。

ことばネットワークとは、属性とことば、あるいはことば同士の関連性の強さをネットワーク図で図示したものである。ことばネットワークは、イメージ・動詞・話題一般を選択することができる。今回の研究では、話題一般（名詞・形容詞・形容動詞・動詞）を解析したものを取り扱う。言葉の出現回数 10 回以上、最低信頼度 60 を共起ルールとして設定した。ことばネットワークには、ノード（丸）、クラスタ、エッジの 3 つが描写される。ノード（丸）は、共起関係にあるそれぞれの単語を示す。大きな円ほど、出現回数が多いことを示している。エッジはノードとノードを結ぶ線であり、共起関係があることを示し、線の幅は共起関係の頻度を示す。クラスタは、エッジで結びつき合ったノードの塊であり、話題のまとまりを示している。この手法を用いて 1 年次の実習終了後の記述内容の構造と 2 年次のそれとを比較すれば、時系列上での変化が明らかになることが期待される。

6) 倫理的配慮

研究対象者となる学生に、実習の成績結果が返却された後に研究の概要、個人情報保護に関する事項、侵襲および安全管理に関する事項、研究中・終了後の対応、自由意志による研究の参加について口頭と説明書をもって行った。同意書への署名をもって研究参加の同意を得た。本研究は、N 大学学術審査委員会の承認を得て実施した（承認番号：15-019）。

Ⅲ. 結果

1) 基礎看護学実習 I

基礎看護学実習 I 終了後に書かれた「実習のまとめ」を上記の方法で分析した結果、ことばネットワークでは、クラスタ数は 5 個、ノード数は 68 個、のべ単語数は数 6582 語であった（図 1-1、図 1-2）。「実習」、「自分」、「患者」とした大きなクラスタがあり、「看護師」、「コミュニケーション」がそれぞれ中心となったクラスタ、「気」、「良い」を中心としたクラスタができた。最も大きなクラスタでは、「患者」、「実習」、「自分」が強い共起関係であった。「患者」に対して「空間」、

「ベッド」、「窓側」、「カーテン」、「大部屋」、「プライバシー」など、生活環境に関わることばについて強い共起関係が見られた。また、「声」、「話」、「音」といった聴覚に関わることばについても強い共起関係が見られた。

「看護師」を中心としたクラスタでは、「いる」、「行う」、「思う」の動詞がみられた。また、「看護師」に「生活環境」、「生活」、「部屋」、「個室」と「看護師」との共起関係が見られた。

「コミュニケーション」のクラスタでは、「とる」、「病室」と強い共起関係にあった。「コミュニケーション」は単語頻度解析でも上位になっていた。

「気」のクラスタでは「聞く」、「言う」、「使う」などの動詞と「大切」、「必要」と共起関係があった。

単語頻度解析の結果、最も多く使われていた単語は、「患者」、「自分」、「実習」、「看護師」、「気」であった。「気」は、データを参照すると「気遣う」、「気づく」、「気持ち」などとして多く使われていたが、頻度単語分析にも言葉ネットワークにも表現されなかった。

「見る」、「行う」、「考える」といった動詞は中位にみられた。

2) 基礎看護学実習 II

ことばネットワークの分析の結果、クラスタ数は 6 個、64 個のノード数となった。のべ単語数は数 6817 語であった（図 2-1、図 2-2）。

「患者」を中心としたクラスタ、「援助」、「実習」、「考える」を中心としたクラスタの 2 つの大きなクラスタができた。「患者」を中心としたクラスタ、「援助」、「実習」、「考える」を中心としたクラスタは近い距離となった。また、実習期間である「3 週間」を中心として「得る」、「学ぶ+できる」のノードに強い共起関係をもったクラスタができた。「3 週間」は単語頻度分析でも上位にある。「3 週間」を中心としたクラスタは、「患者」を中心としたクラスタ、「援助」、「実習」、「考える」を中心としたクラスタと距離をもっていた。「患者」を中心としたクラスタでは、「学校」、「技術」、「練習」など、学生が学内でやってきたことや「危険」、「観察」といった患者に関わることに共起関係が見ら

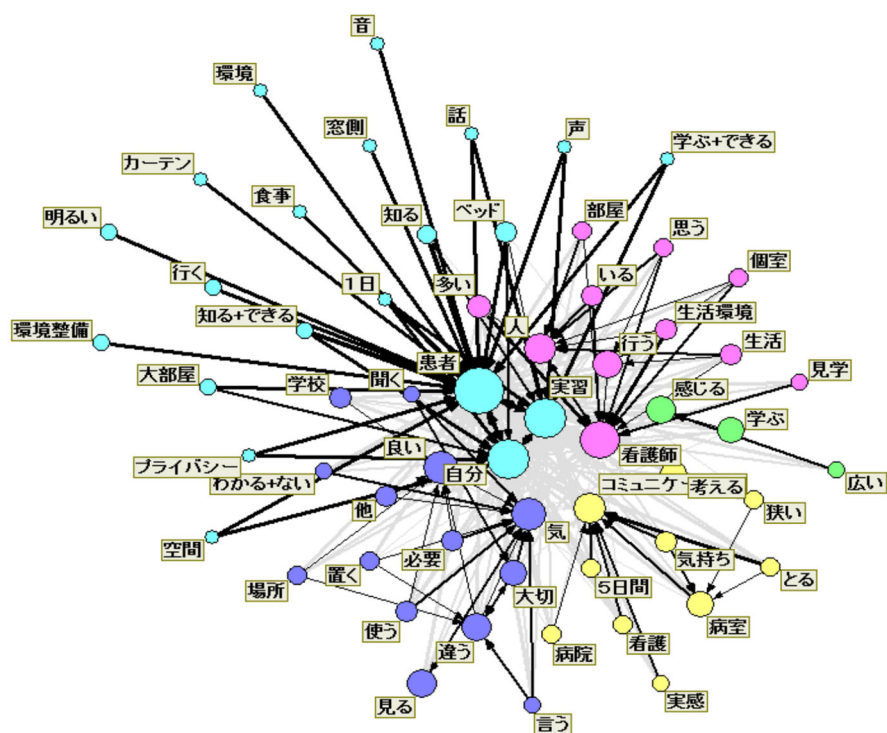


図1-1 基礎看護学実習Ⅰ ことばネットワーク

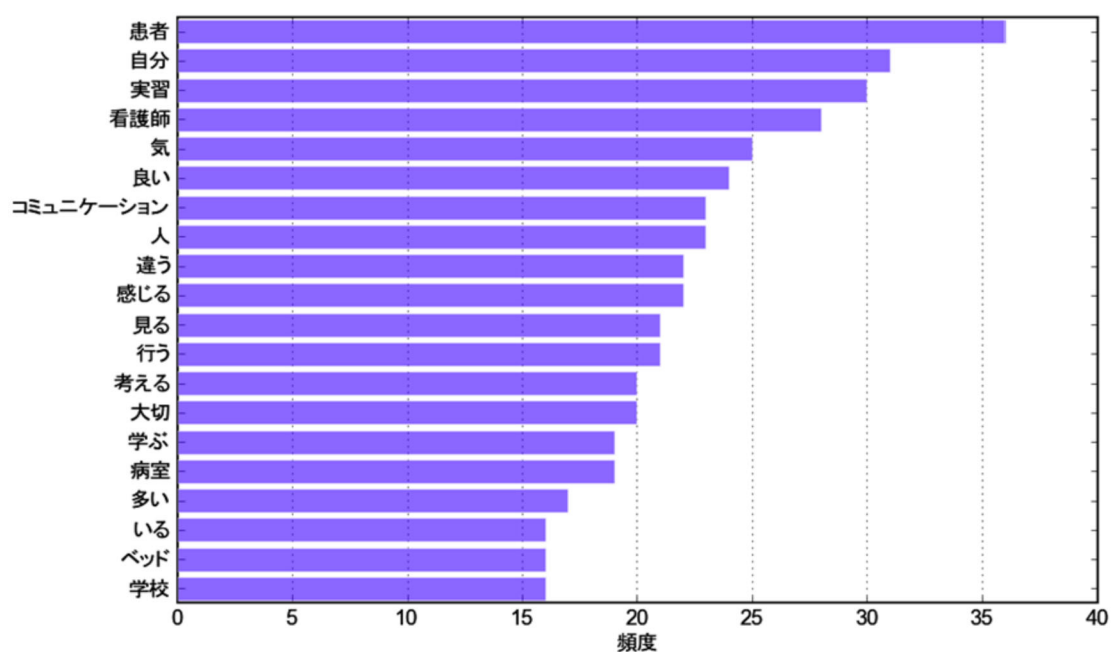


図 1-2 基礎看護学実習Ⅰ 頻度単語分析

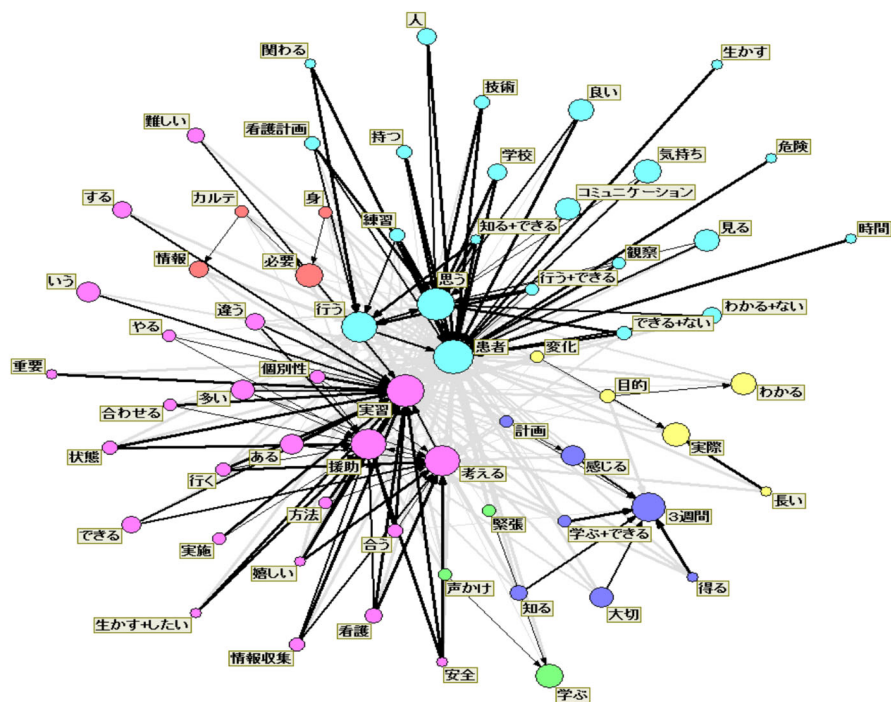


図 2-1 基礎看護学実習Ⅱ ことばネットワーク

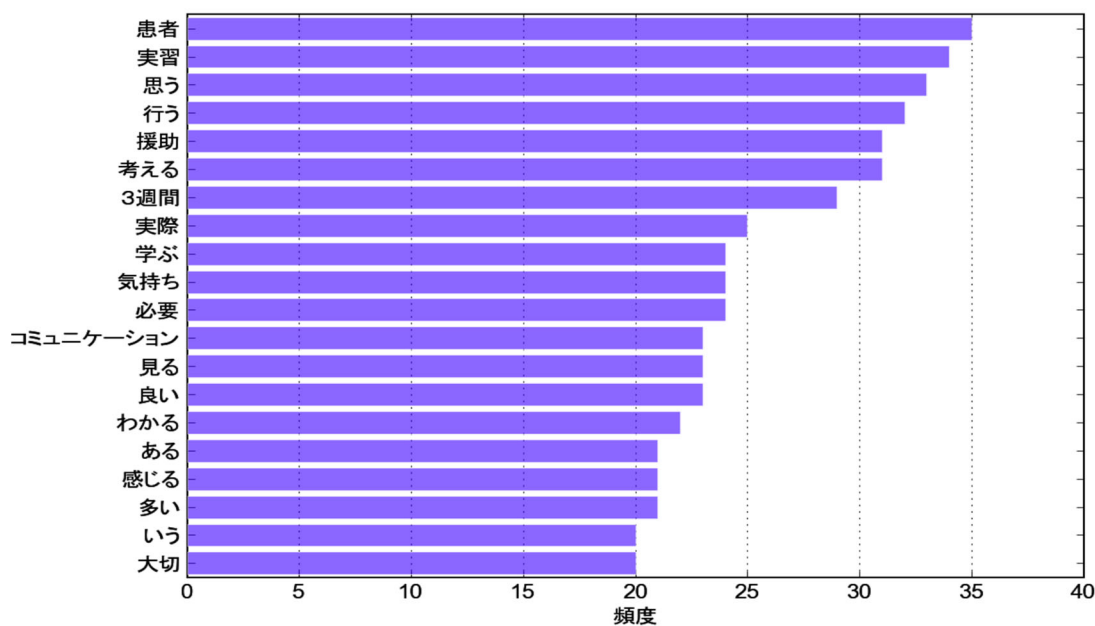


図 2-2 基礎看護学実習Ⅱ 頻度単語分析

れた。また、「生かす」、「関わる」、「知る+できる」などと動詞に強い共起関係が見られた。「行う」のノードは「患者」や「実習」のノードに共起関係を示していた。

「援助」、「実習」、「考える」を中心としたクラスターは、多数のノードが強い共起関係をもっていた。特に

「安全」、「看護」、「情報収集」、「嬉しい」は、「援助」、「実習」、「考える」のすべてと強い共起関係をもった。また、「考える」では、「嬉しい」、「安全」、「看護」といったノードと共起関係が見られた。「援助」では、「安全」、「情報収集」、「状態」、「方法」といった援助に欠かせない言葉と強い共起関係にあった。「実習」

には、「安全」、「情報収集」、「看護」、「重要」などのノードや「する」、「合わせる」、「行く」などの動詞にも強い共起関係が見られた。

単語頻度解析では、「患者」、「実習」、「思う」、「行う」、「援助」が上位となった。その他、「考える」、「学ぶ」、「見る」、「感じる」といった動詞が上位 20 語の中に多くみられた。

3) 基礎看護学実習Ⅰ・Ⅱの結果の変化

以上をまとめると表 2 のようになる。表中の単語は、テキストマイニング単語頻出解析上位 10 語であり、○は中心となるクラスタである。

表 2 テキストマイニング結果のまとめ

実習名 (年次)	単語とクラスタ (太字は共通のもの)
基礎看護学実習Ⅰ (1 年次)	○患者, ○自分, ○実習, ○看護師, ○気, ○良い, ○コミュニケーション, 人, 違う, 感じる
基礎看護学実習Ⅱ (2 年次)	○患者, ○実習, ○思う, ○行う, ○援助, ○考える, ○3 週間, 実際, 学ぶ, 気持ち

基礎看護実習Ⅰと基礎看護実習Ⅱの結果から特徴的な変化がみられたのは以下の 4 点である。

1. 変化 1

単語頻度分析の結果から 1 年次に上位であった「看護師」という単語が 2 年次になると上位 20 語の中にみられなくなった。ことばネットワークでは、1 年次には「看護師」というノードが中心となるクラスタがあったが、2 年次では、64 のノード中に「看護師」のノードがなくなった。

2. 変化 2

単語頻度分析の結果をみると、「行う」、「考える」の動詞の頻度が上がってきている。また、ことばネットワークでは、「考える」、「行う」といった動詞がクラスタの中心になって構成されているものが見られる。

3. 変化 3

基礎看護学実習Ⅰで単語頻度分析に見られなかつ

た「気持ち」という言葉が、基礎看護学実習Ⅱでは見られるようになった。基礎看護学実習Ⅰのことばネットワークで「気持ち」は、頻度は低いながらも「コミュニケーション」や「病室」と共起関係を持っていたのに対して、基礎看護学実習Ⅱでは、「患者」と共起関係を持つように変わっている。

4. 変化 4

1 年次、2 年次とも単語頻度解析では、「コミュニケーション」の単語は上位に入っている。しかし、2 年次になると頻度回数の順位が下がっている。1 年次には、コミュニケーションを中心としたクラスタができていたが、2 年次になると「コミュニケーション」は、「患者」を中心としたクラスタの中に取り込まれ、「患者」と共起関係を示すようになる。

Ⅳ. 考察

1) 身体的実践としての看護師

1 年生の基礎看護学実習Ⅰは、入学して 4 か月が経過した学生の実習であることを考慮して、看護師の職業を実感できるように、実習の目標に「患者の状況に応じた看護を知ることができる」をあげている。学生は、看護師が実際に働いている場面を目の当たりにし、看護活動の実際を見ることよりも、看護をしている看護師の姿そのものに注目していたため「看護師」というノードを中心としたクラスタができたと考えられる。この段階ではまだ学生にとって「看護師」は、見て懂れる対象でしかないと考えられる。2 年次の基礎看護学実習Ⅱでは、学生は清拭や洗髪といった日常生活援助を実践する。また、患者と関わり困ったこと、戸惑ったこと、自分が患者に行った援助を振り返ることで、看護師は対象ではなく自らの身体的実践となっている。看護師は見られる他者の役割ではなく、自らのふるまいそのものになっている。

伊藤・中岡⁷⁾は、1 年次の学生を対象とした実習について「夢の実現」や「懂れ」に関する項目が高く、漠然とした関心や意欲は持っているが、現実的な行動には結びついていない可能性がある」と述べている。1 年次の学生は、看護師という職業に対して懂れ

が強く、看護師という仕事に具体性が見いだせず、漠然と看護師という職業を捉えている傾向があることが考えられる。しかし、2年次になり実際に患者へ日常生活援助を提供した経験から、看護師が名詞として名指されるものではなく、自らふるまう行為や態度として具体化されていったと考えられる。

2) 看護実践者への一步

基礎看護学実習Ⅰでは、学生が主となって患者へ看護を実践する機会は少なく、患者の病室環境や看護師の仕事を見学する場面が多い。そのため、基礎看護学実習Ⅰでは、看護の実践はまだ「考える」、「行う」ことを伴うものではない。一方、基礎看護学実習Ⅱでは、学生が患者へ日常生活援助を実践する。学生は、日常生活援助を実践するために「考える」、「行う」を繰り返していたため「考える」、「行う」がクラスタとなったと推察される。

基礎看護学実習Ⅱでは、看護を実践していくための1つの方法として看護過程を理解することを目標にしている。実習目標の達成の視点から考えると、学生は看護過程の看護計画の立案、実施、評価の部分を実践していたと捉えることができる。

また、池西⁸⁾は「一人ひとりの訴えに耳を傾け、状態を観察し、適切な方法で確実な技術を用いて実践し、その成果を評価する。この一連の看護実践に欠かせないのが思考力である」と述べている。学生は受け持った患者と向き合い患者のために何ができるのか思考をしていたと考えられる。

3) 患者に対する「気持ち」の出現

基礎看護学実習Ⅰで単語頻度分析に見られなかった「気持ち」という言葉が、基礎看護学実習Ⅱでは見られるようになった。基礎看護学実習Ⅰのことはネットワークで「気持ち」は、頻度は低いながらも「コミュニケーション」や「病室」と共起関係を持っていたのに対して、基礎看護学実習Ⅱでは、「患者」と共起関係を持つように変わっている。

基礎看護学実習Ⅰでの学生は、学生が主体的に患者に日常生活援助を実施することはなく、看護師が実施している場面を見学するにとどまっている。基礎看護

学実習Ⅱは、事前に学内で患者への日常生活援助を練習する。学内での練習では、患者役が学生であり、またモデル人形を使用しての練習になることが多いため、患者の気持ちを考えるまでに至らず、相手からの反応に限界がある。患者の気持ちを考えることが要求されず、相手からの反応を感じ取る必要がない。しかし、基礎看護学実習Ⅱにおいては、実際の患者への援助に際して、患者の気持ちを考慮したり推測したりする必要性に直面する。梶田⁹⁾は、看護師に求められることとして「医療についての最新の知識や技能もある程度身につける必要があるが、同時に患者の側を向いて仕事をする」と述べている。基礎看護学実習Ⅱを経験することで、学生は、患者の立場になって感じ考える。すなわち患者の「気持ち」を意識することができるようになったと考えられる。

4) 「コミュニケーション」の変化

基礎看護学実習Ⅰでの学生は、初めて医療現場に立ち入ったことや、自身とは年齢の異なる患者と接することに強い緊張感をもつ。「私は最初、聞き出せばコミュニケーションがとれていると思っていた」、「緊張していて患者さんとコミュニケーションをとるのに精一杯だった」の記述がある。基礎看護学実習Ⅰでは、初めて出会った患者とコミュニケーションをとることに意識が集中したため、クラスタの中心になったと考えられる。ここでは「コミュニケーション」はとるものとして、抽象的にしか意識されていない。しかし、基礎看護学実習Ⅱでは、「コミュニケーション」は「患者」と共起関係をとるようになった。

E. M. ロジャーズ¹⁰⁾は、コミュニケーションを「相互理解のために参画者が互いに情報を作り分かち合う過程」と定義している。学生は、日常生活援助を実践することを通して、患者と関わることでコミュニケーションをとらなくてはいけないという考えから離れ、コミュニケーションとは患者を理解するだけでなく、学生自身のことも理解してもらうことであると実感できたためと考えられる。そのため「コミュニケーション」という言葉を意識しなくてもよくなったため頻度も下がったと考えられる。

V. 結論

基礎看護学実習Ⅰでの「実習のまとめ」では、実習で学生が見てきたままの事実が多く見られた。しかし、基礎看護学実習Ⅱの「実習のまとめ」では、患者への看護援助を実践することで看護師としてのあり方や患者を想う気持ちが表現されていた。学生は、実習での経験を通して、1. 身体的実践としての看護師、2. 看護実践者への一歩、3. 患者に対する「気持ち」の出現、4. コミュニケーションの変化の4点において看護観の変化が起きていることを示した。しかし、これらの看護観の変化は、1年次から2年次に至る変化であり、途上のものである。今後は看護基礎教育終了までの同一の学生集団が、実習を経ることでどのように看護観をどのように変化をしているのかを明らかにしていくことが必要である。

引用文献

- 1) 薄井坦子. 科学的看護論.1997;東京;日本看護協会出版会
- 2) 掛谷益子,名城恵美,細川つや子,他.インターナショナル Nursing Care Research;2007;6 巻1号:59-66.
- 3) 當間彩.看護学生が臨地実習で看護観を培っていく過程-看護学生時代に看護師の言動から受ける影響-.神奈川県立保健福祉大学実践教育センター看護教育研究集録;2014;39:81-88.
- 4) 柿沼直美,長谷川真美,今川絢子.学生の看護観形成に在宅看護論実習が及ぼす影響.日本看護研究学会雑誌;2015;Vol.38No.3:242.
- 5) 安藤詩乃,加世田有季,中越登子,他.臨地実習前後における看護観の変化-看護学生の患者の捉え方に対する考え方の比較-;バイオメディカル・ファジィ・システム学会誌;2008 10 巻 2:1-7.
- 6) 大槻優子.女子看護学生の母性意識の変化.1年次後期から3年次母性看護学実習終了までの経年的変化.母性衛生;2004;45 巻 1 号:118-125.
- 7) 伊藤朗子,中岡亜希子,岡崎寿美子,他.早期体験実習の評価と学生の学びに関する基礎的検討.千里金欄大学紀要;2009;2009:63-72.
- 8) 池西静江.看護実践に求められる思考力を育成する-講義・演習で思考力を育成する教育方法-.医療;2014;68 巻 2 号:72-75(2014).
- 9) 梶田叡一.看護教育新カリキュラム展開ガイドブック No1.1996;東京;「看護教育」編集室編:56-62.
- 10) E.M.ロジャーズ,安田寿明訳.コミュニケーションの科学マルチメディア社会の基礎理論.1992;東京;共立出版:211-214.

Title: Changes in nursing students' views of nursing in clinical training - Textmining Analysis of "Comments on Practical Training" in Basic Nursing Practice Program I and II -

Author(s):

Yumi Akiyama ¹⁾, Takao Kato²⁾

Address(es):

¹⁾ Department of Nursing, College of Life and Health Sciences, Chubu University, 1200 Matsumoto-cho, Kasugai, Aichi 487-8501, Japan;

²⁾ Graduate School of Humanities, Nanzan University, 18 Yamazato-cho, Showa-ku, Nagoya, Aichi 466-8673, Japan.

Keywords: basic nursing practice , view of nursing, text mining